その他資料1

令和８年度

生駒市教育委員会主催
夏期研修会のまとめ

令和８年１０月

令 和 ８ 年 度 生 駒 市 教 委 等 主 催 夏 期 研 修 一 覧

研　修　会　名	内　　容	対象者	期　日	人数
生駒市 教育研修会	多様な学びの実践に向けて ～「教える」から「伴走する」へのシフト～	小中教職員	7月31日 （金）	244
特別支援教育 コーディネーター 研修会	奈良県立ろう学校学校見学	幼小中 特別支援 コーディネーター	8月18日 （火）	46
生駒市英語 小中連携会議	言語活動を中心に据えた授業づくり・単元計画	小中教職員	7月28日 （水）	24

生駒市教育委員会主催研修会

生駒市教育研修会 実績報告書

【日 時】令和８年７月31日（金）13:45～16:35

【場 所】生駒市北コミュニティセンター

【講 師】全体研修 信州大学 准教授 荒井 英二郎 氏

第1分科会 大分大学 准教授 藤村 晃成 氏

第2分科会 宇美町立学びの多様化学校 吉川 裕二 氏

第3分科会 玖珠町立くす若草小中学校 脇 こなぎ 氏

第4分科会 生駒市教育委員会事務局 金 指導主事 江上 指導主事

第5分科会 元大阪市港区長 山口 照美 氏

【参加者】244名 （後日市内全教員オンデマンド視聴可）

【テーマ】多様な学びの実践に向けて ～「教える」から「伴走する」へのシフト～

【ねらい】・令和6年6月に策定した「第3次生駒市教育大綱」に示した教育理念と教育方針に沿った教育を進めるため、先進的に取り組んでいる学びの多様化学校の取組及び人権や福祉の視点から学びの在り方について考えることを通して、今後の教育活動を推進するために理解と見識を深めること及び教職員の主体的・対話的な参加による学びの充実を本研修会の目的とした。

【アンケートより】

1.本日の研修満足度について（10が高く、1が低い）

	10	9	8	7	6	5	4～1
%	10.1	11.4	26.6	29.1	5.1	8.9	8.9

◆ 感想や意見

第1分科会（「居場所と学び」安心できる学校ってどんな場所?）

・安心できる学校とはどういう事かが色々な人と話し合えて良かったです。

・短い時間の中でも有意義な話し合いができた。

・二学期からの指導や心構えに役立つ情報を得られた。

・解決志向の考えを用いられた研修で新しい取り組み方を御指導いただいたことがよかったです。

・安心できる学校について、改めて考えることができました。「学校のあたりまえ」という「水」について考えるが印象に残っています。「その水にしっくりなじめる魚は、その水のことを考えなくなる。その水になじめない魚だけがその水について考え続ける」はまさしくその通りだと思います。水について考え続ける自分でありたいです。

・安心できる学校にするためにはまずは教員も安心して働ける職場にすること、そして学校の水という存

在に立ち止まるという言葉に出会い色んな子どもたちの顔が思い浮かび考えさせられました。
・他の方の意見を聞けたのが面白かった。
・話し合いは4人という人数がちょうど良かったと思います。他の学校の先生と交流できて良かったですが、交流無しで講師の先生のお話をきく時間が長くても良かったのではないか思いました。
・所属校では、不登校支援に直接関わる機会が少ないのですが、グループの先生方から日々大変悩まれていることをお聞きして、自分ももっと向き合う必要があることを痛感しました。一方で、安心できる学校とは?との問いに対して、モヤモヤが残ったままです。
・明日から、もっと子どもたちと対話をして、子ども目線での考えを意識することで問いに対して、もっと向き合って行きたいと思います。
・事例検討をグループの人としたことで、人によって、子どもを見る目は違うし、物事を捉える前提や大事にしていることも違うことを体感することが出来ました。また、自分が「全員参加のために」考えていたことに気づき、自分の中の「べき」がこんなにも身近に当たり前にあることに気づかされました。参加できなかったときをどう捉えていくかは、教師と子どもと保護者の余白?によって変わると思うので、まずは自分の中の余白を増やしていけたらと思いました。
・様々な先生方のお話をきいたり、考え方をきいたりで、自分の視点とは違うことに触れることができました。
・いろいろな先生方と対話する中で自分の考えを捉え直したり、さまざまな考えを知ったりすることができてよかったです。
・市内の先生方と教育について対話をすることができ有意義であった。
・ありがとうございました。

第2分科会(「居場所と学び」学校の「当たり前」をどう見直す?)
・学校生活でのきまりを守らせなければと必死になっている自分の考えを違う方向から考え直す良いきっかけになりました。
・学校のあたりまえとは、誰にとってあたりまえなのか考えさせられた。将来的にどんな力をつけていくのがよいのか、私たちもよく考え、子どもたちに提示してよく考えてもらい、取り組む必要があると思う。社会はまだまだあたりまえでないことを受け入れできていないし、子どもは将来を見据えた考えで決定するかわからないので。
・ないものを、取り入れたい。
・講師の先生方のお話がとても面白く、興味深く、また、ご教授いただきたいです。是非に。
・一人ひとりを大切にする教育の 1 つの方法であると思いました。
・少人数の学校だからこそできる教育だと思います。
・現在の一斉指導を補完し、それに適応できない子たちを救う手立てだと思います。
・これを 1000 人単位の学校でするには非常に多くの職員が必要になると思います。
・当たり前だと思っていることを見直していくことの可能性を感じました。
・多様化学校の取り組みを知り、自分自身の価値観を変えていく必要もあると感じた研修でした。環境、設備、人員等、ハード面のハードルが高いことで難しいことがたくさんあり、否定的に考えてしまいがち

です。学びのあり方がどんどんと変わっていくこの過渡期に、自分も学び続ける人であろうと思いました。
・学校の当たり前をどう見直すに参加しました。7 つの「ない」に、そんなこと可能なのか?と正直疑問でしたが、それを踏まえて今現場でできることを参加の先生と討論することで、少し見えたきがしました。
・学校の当たり前を無くした、多様化学校の取り組みは子どもにとって過ごしやすい環境だなと感じました。しかし一方で学校側ではその苦悩などがあることも知れてよかったです。この取り組みを自分の勤めている学校で取り組むとなると、何が出来るのかを考える良い機会なりました。
・ハピネス分校のお話を伺い、「全ての子どもと大人が、安心して生活し、学習できること」という唯一の校則についてとても納得しました。
・服装規定や持ち物制限など、ものが増えていくに連れて、ルールも増えたり変わったりしていっていますが、今一度見直せるところもあるのではないかと感じました。ハピネス分校の唯一の校則は、どの学校においても守るべきルールとなると思いますので、その点を意識したうえで勤務している学校の実情に合わせて考えていくことが大切なのではないかと考えました。
・様々な視点から物事を考えることができ有意義な時間になりました。
・学校としてできることや明日からできることについて考えることができました。
・学びの多様化の話を聞き、大規模でするのは難しく感じた。

第3分科会（「子ども視点」「自分で決める学び」をどうすれば実現できるのか?）
・いろんな学校の先生の取り組みが聞けたので良かったです。2 学期からの学習の参考にしたいと思いました。
・学校間や教師間で、自由進度学習や探究学習への意識が異なっているように感じた。現状の教え方を変えていくということに抵抗感があったり、生徒の反応が気になったりしていることも分かった。
・先生方とお話することができ、どのように児童に自己決定させているのかや、自由進度学習の様子などをお聞きすることができ、有意義な時間でした。
・自分で決めるために今できることを考えることはできたが、教員自体がまだその認識が出来ていないと思うので、教員への理解や意識改革も必要と感じた。また、そもそもの教員の数や子供の数に対して適切な環境が揃っていなければ、子供の人数が多ければ多いほど、実際の教育現場では難しいことではないかと感じた。
・選択肢を与え自己決定するためにも、子どもとの関係づくりが大事で、どの場合においてもそこが一番必要なことなのかなと感じました。子ども自身の経験の有無を関係しているという視点も知ることができて良かったです。もう少し担当された先生の話を詳しく聞く時間があっても良かったかなと思いました。
・「自分で考えて自分で決める力」現任校では多くの子ども達にとって難しい課題ですが、教員側が丁寧にアセスメントして、ぜひとも子ども達に身に付けて欲しいと思いました。また、この取り組みを進めるに当たって余白がとても大事だと感じます。脇先生がおっしゃっていたように、できない理由を探しがちですが、どうやったらできるのか、知恵を出し合って考えていきたいと思います。
・子どもが自分で決めることができるために、大人自身が自分で決めることを実行していかないといけ

ないと感じました。例年通りではなく、より良い明日のためにどう変えていくか常に考えていこうと思いました。
・「子どもが自分で決める」「主体的な学び」のためには何が必要なのか。自分自身で考えたり対話を通して色んな視点から考えることができました。教員自身もそうですが子どもたちの経験値を上げられるようにしていきたいと思います。
・「できない」にどう向き合うのか、自分のなかで考えが深められた。
・違う県の全く違う取り組みを聞く機会はないので、貴重でした。
・自分で決めるということは大人でも難しいということがわかりました。また年齢によって自己決定ができるようになるようなサポートをしていく必要があるのだと思いました。
・子どもに選択させることで、なかなか選択ができず、どのようにアプローチすればいいかで、多くの先生方が日々悩みながら実践をしていることを感じた。それぐらい自分で選択するということが簡単なことではないこと、そのためにいろいろな経験をさせてあげることが必要であることを感じた。
・先生の純粋な気持ちが伝わってきました。他校の先生方と話すことができて、自分が大切にしてきたものも再確認できました。
・自分たちで、対話しあって課題を解決していく研修でとてもよかったです。私たち教員が児童にもこのような形で日々過ごせていければ、良いなと思いました。
・いろいろなお話を聞けて良かったです
・子ども一人一人の幸せとはなんなのか。そのために教師ができることはなんなのか。これからも考え続けたいと思いました。
・まずは、子供を信じて委ねることが大切であると感じた。時間のゆとりを持って、子供も教師も経験値を積んでいけると、良いのだが。
・自分たちで考える時間が取られていて、色々な先生方と交流できて意見交換することが楽しく、また励みになりました。
・まず、エアコンの効きが悪く、研修に集中できる環境ではありませんでした。研修テーマとしては学びの多様化に向かうもので、日々の学校経営の良いヒントになりました。改めて、落ち着いた環境で話し合いができれば、研修が深まるように感じました。ありがとうございました。
・クーラーが効いてなくて、とても暑かったですが、自分で決める学びを子どもたちに考えさせるには、子どもたちの経験値を上げることが大事だという話がとても印象に残りました。また、くす若草小中学校の脇先生の、いろいろ悩みながら、試行錯誤しながら、日々取り組まれている話がとても印象的でした。2学期から子どもたちの経験値を上げる取り組み、選択肢を準備して子どもたちが自分たちで決める学びを、できることから実践していきたいと思いました。ありがとうございました。
・学びの多様化学校についての説明を聞いたがよくわからなかった。
・お疲れ様でした。暑かったです。

第4分科会（「人権の視点」「じぶんらしさ」を認めるってどういうこと?）
・たくさん考えて研修をしてくださっているのが伝わりました。交流する場も多く、深い学びになりました。ありがとうございました。

・自分らしさを認めるってどういうこと?について、生徒指導・特別支援の面から考えました。新しく知ることがたくさんあり、非常に有意義な時間となりました。また、同じグループの先生の考えから学ぶこともでき、2学期からの学校に活かしていこうと思いました。
・少人数で、アットホームな雰囲気の中、研修ができました。自分らしさを認めるということについて、考えていきました。意識を変えていかないといけないです。そのためにはまず行動です。
・市内の先生方と意見交流ができてよかった。

第5分科会(「福祉との連携」教育と福祉)
・学校と行政の連携について、管理職の責任が非常に大きいと思います。管理職の視野をいかに広げて保護者と福祉を繋げるのか、また教職員にその道筋を知らしめていくのか、手腕が問われると感じました。
・学校側と行政側の両方の立場を経験された方の話なので深く同意できる点が多かったです。

2.「令和8年度 生駒市教育研修会」アンケート結果の検証

・今回の研修会では、参加者の 77.2%が全体評価として「10～7 点」と回答した。今年度は、学びの多様化学校における実践事例や「第３次生駒市教育大綱」の理念・方針に沿った教育を学ぶ機会に加え、教職員による対話や意見交流の場を設定したことが、ニーズに合致した研修につながったと言える。一方で、昨年度と比較して満足度が低下した要因としては、会場の空調故障という環境面の不備に加え、紹介した実践事例が自校で実現可能かという点において参加者の受け止めに差が生じたことが影響していると推測される。

・「多様な学びの実践に向けて ～『教える』から『伴走する』へのシフト～」と題し、学びの多様化学校の取組に加え、人権や福祉の視点から学びの在り方を考える研修を開催した。教職員の多様なニーズに対応できるよう分科会方式を採用し、研修内では対話や意見交流の時間を設定したことで、参加者がそれぞれの学びやこれまでの取組を共有する場となった。また、分科会後の全体会では各分科会からの報告時間を設け、他の分科会の内容についても情報共有を図った。教職員にとって、自らの実践を振り返り、多様な学びの在り方を深く考察する貴重な機会になったと考えられる。

・教員アンケートでは、有識者や他市の先進事例からの学びに加え、本市教職員との対話を通してこれまでの実践を振り返り、今後の取組への意欲を示す声が多く見られた。本市では普段から伴走・越境型研修として教員のコミュニティを形成し意見交換できる場を設定している。今後はこのような場の設定だけでなく、市内の教職員による自主的な研修が活性化し、教職員が自走できる研修の在り方を検討していく必要がある。

・市教委では、今後も授業改善や働き方改革等の現場のニーズに合った研修を行い、「第3次教育大綱」に示した基本理念、基本方針に沿った教育を進めていく。

生駒市教育委員会主催研修会

特別支援教育コーディネーター研修会 実績報告書

【日 時】令和8年８月18日（火）9:30～11:30

【場 所】奈良県立ろう学校

【参加者】46名（幼稚園・保育園・こども園9名、小学校９名、中学校９名、市外17名、市外指導主事2名）

【テーマ】奈良県立ろう学校施設見学・難聴疑似体験

講座「聴覚障害と耳のしくみ」「難聴児の支援と配慮」

【ねらい】聴覚障害の特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒に対する総合的な支援体制の整備・充実を図る。

【アンケートより】（アンケート回答者29名【市外の参加者含む】 回答率 63%）

1.本日の研修内容について

	1 とても良い	2 良い	3 普通	4あまり良くない	5 良くない
%	72.4	27.6	0.0	0.0	0.0

① ろう学校についての理解・学び

- 来年度、ろう学校幼稚部から進学する児童への配慮が少し分かった。
- ろう学校について詳しく知ることができた。また、頼ってよいことが分かった。
- ろう学校について知らないことばかりだったため。
- 難聴児や聾学校に関する基礎的な知識を学ぶことができた。
- ろう学校に転入した幼児の現在の様子を知ることができた。
- 普段見ることのできないろう学校について知ることができた。
- ろう学校がどのようなところか知ることができた。
- 校舎や教材、検査室などを見学でき、ろう学校への理解が深まった。
- ろう学校のことを知ることができた。

② 実体験（難聴疑似体験）による気づき

- 実際に難聴体験をして聞こえにくさに驚いた。
- 難聴体験を通して聞こえにくい人の気持ちを自分事として考えるきっかけとなった。
- 難聴者の立場になることができた。
- 体験を通してしか得られない学びがあった。
- グループ活動での困り感や不安感を理解できた。
- 雑音下での聞き取りの難しさや周囲への気遣いを実感した。
- 「聞きたいけれど聞こえない」体験ができ、聞こえない以外の困難さも理解できた。
- 会話についていく大変さや不安、緊張を実感した。
- 聞こえにくさによる不安や焦燥感を実感した。

・　子どもの目線や立場を経験することができた。
・　耳が聞こえない人のことをより具体的に想像できるようになった。

③　講義・研修内容に対する評価

・　疑似体験や講義を通して多くの学びがあった。
・　校舎見学や講義内容が分かりやすく、充実していた。
・　聴覚障害や耳の仕組みについて非常に分かりやすかった。
・　知識のない人にも分かりやすい内容だった。
・　体験と理論の両面から学ぶことができた。
・　お話がとても分かりやすかった。

④　今後への活用・意識の変化

・　どのような配慮が望ましいか学ぶことができた。
・　今後の保育に生かしていきたい。
・　通常学級の児童への対応にも生かせると感じた。
・　支援の在り方を学び、子どもの変化に気付けるようにしたい。
・　必要な支援や関わりについて理解することができた。
・　つながることの大切さを知ることができた。
・　新たな取組につながると思った。

2. 本日の研修の内容は、授業づくり、子どもたちへの指導等に役立ちますか

	1とても役立つ	2 役に立つ	3あまり役立たない	4役に立たない	5わからない
%	44.8	48.2	3.5	0.0	3.5

①　今後の支援・指導への活用

・　今後、気になる子どもがいたときに、今回の経験を生かして子ども支援や保護者支援ができるのではないかと考えている。
・　難聴児への対応について理解することができた（ジェスチャーや口形など）。
・　「難聴理解かるた」をすぐに活用したいと思った。
・　研修を通して、障害の有無に関わらず、説明は端的にし、ポイントを繰り返して伝えることの重要性を再確認することができた。また、「分かった？」という声掛けだけでなく、より具体的な声掛けを心掛けていきたいと思った。
・　視覚的支援を考える際に、聞こえない立場を想像する視点を学ぶことができた。
・　聞こえにくい子どもたちにどのような支援が必要なのか分かった。難聴体験を通して、声の大きさや話すスピード、口の開け方、ジェスチャーの重要性を理解し、支援につなげたいと思った。
・　耳から入る情報だけでなく、表情や身振り手振りによっても取り残されている感覚を軽減できるため、視覚的な情報の充実にも力を入れていきたいと感じた。
・　本人が「分かっている」と言っていても、本当に理解しているとは限らないことを学んだ。何が分かっているのかを確認することも幼児理解の一つとして捉えたいと思った。
・　聞こえないことへの必要な配慮について考えるきっかけをいただいた。

② 聴覚に関する理解の深化

- 聞こえにくさや違和感を覚えた際には、早期に行動することの重要性を改めて感じた。
- これまで聞こえについてあまり意識していなかったが、本研修を通して、聞こえを気にかけることや、聞こえと識字、聞こえにくさによるしんどさとのつながりを意識して保育に臨むことができると感じた。
- 聴力による困り感を聞いたことはないが、もしかしたらという可能性も考えながら、さまざまな視点で子どもを見ていく上で役立つと感じた。
- 耳の聞こえの様子に気を配ることができそうである。
- 現在、難聴児は在籍していないが、聞こえにくさについて知ることで児童理解の視点が一つ増えた。
- 発達面の課題だけでなく、聞こえにくさが学習の困難さにつながっている可能性もあることを知ることができた。
- 現在、難聴児童は在籍していないが、難聴体験をしたことで、困り感に対する配慮がしやすくなった。
- ロジャーを使っている児童を担任しており、難聴の感覚を少し理解することができてよかった。
- 難聴について、聞こえるか聞こえないかだけでなく、気持ちの面や疲労、ストレスなども含めて生徒理解につながると感じた。支援体制・相談先の認識
- 「相談してくださいね」という言葉が心強かった。

③ 支援体制・相談先の認識

- 聞こえにくい子どもがいるかもしれないと感じた場合に、どこへ相談したらよいのかが分かった。
- 難聴の子どもへの対応について園内でも周知したいと思った。
- 勤務校に聴覚障害のある生徒が在籍しているため、いただいた資料を全職員で共有し、よりよい指導につなげることができると感じた。また、授業中の指導についても改めて見直したい。

④ 実践への意欲・課題意識

- スクリーニング検査を通過していても、日常の保育や生活の中で気になる様子があれば、早期発見に努めていきたい。
- 専門性が高く、園で対応することの難しさを感じた。
- 難聴児への配慮や支援についての話は、知的障害特別支援学校の子どもたちへの支援にも通じる部分が多いと感じた。

⑤ 研修への評価・改善点

- 現在、本校に難聴の生徒はいないが、今後入学してきた際には大変参考になる内容だと思った。
- 今後、聴覚障害のある子どもを担当することになった際に役立つ内容であった。
- 今後、聞こえに不安のある子どもが入学する可能性があるため、役立つ内容だと思う。
- 耳が聞こえにくい生徒への対応は、交流学級の子どもへの支援にも生かせると思った。

3. その他、本日の研修全般についての感想やご意見についてご記入ください

① 聴覚障害への理解と気づき

- 聴覚障害のある幼児児童生徒への支援だけでなく、保護者支援や医療機関との連携など、多様な機能を持つ学校であることを知ることができた。
- ろう学校について詳しく知ることができた。また、難聴児への対応について学んだことを保育に生かしていきたい。
- 一人一人の聞こえについて思いを馳せる機会となった。
- 聴覚障害のある幼児に関わった経験はないが、理解を深めることができた。
- 忙しい中、分かりやすく、ろう学校の仕組みについて説明していただき、見学や体験もさせていただき、よい経験となった。
- 初めてろう学校を訪問した。学校の概要についてよく理解することができた。

② 実体験による学び

- 難聴体験や難聴児に対するさまざまな配慮について知ることができ、有意義な時間となった。
- 校内見学や難聴体験などもでき、学びが多かった。
- 短時間にさまざまな内容がまとめられており、分かりやすかった。また、体験を通して自分事として捉えることができた。
- 実際に見たり、触れたり、感じたりすることができ、とても充実した研修だった。
- 実際に体験して初めて分かることが多く、聞こえにくさを感じている子どもの気持ちを理解することができた。
- 講義だけでなく、普段は体験できないことも多く経験することができ、大変有意義な研修となった。
- 校長先生の話にあったように、体験では聞こえ方だけでなく、自分の声の大きさが分からない不安感も感じた。
- 難聴体験を通して、聞こえないことによる苛立ちを体験することができた。

③ 教育現場への活用意識

- ろう学校について詳しく知ることができた。また、難聴児への対応について学んだことを保育に生かしていきたい。
- 騒がしい教室環境よりも、誰が話しているのか、どのような話題なのかを明確にすることで、学習理解や安心して生活することにつながると感じた。今後の授業改善の参考にしたい。
- 実際に体験して初めて分かることが多く、保育現場で何ができるのかをさらに考えていきたい。
- 園でも毎年度聴力検査を実施しているが、その結果を保育に十分生かせていたかを振り返る機会となった。今後は子どもの生活や遊びの様子を丁寧に把握していきたい。
- 特別な支援を必要とする子どもたちにとって安心できる環境をつくり続けることの大切さを改めて感じた。
- 黒板に書きながら話さないことや、指示の前に静かにさせることの重要性を実感した。学んだことを校内の教職員にも共有したいと思う。

④ 研修への評価・要望

- 施設見学では、さまざまなところに工夫がされていることを知ることができた。とても貴重な経験とな

った。
・　貴重な機会となった。新任研などでも実施されるとよいと思う。
・　本日は貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。
・　忙しい中、研修をサポートしていただいた県立ろう学校の先生方に感謝している。
・　ろう学校の先生方に丁寧に案内や講義、体験をしていただき、大変学びになった。
・　校舎見学の中で、実際の教材や施設を見せていただき、とても参考になった。
・　班編成をしていただき、少人数で見学や体験ができてとてもよかった。
・　有意義な時間となった。
・　参加していて興味が尽きない充実した研修だった。
・　電車での移動距離が長く、駅からも遠かったため、近隣に駐車できるような配慮があるとよかった。
・　初めてろう学校を訪問した。学校の概要についてよく理解することができた。一方で、子どもたちへの関わりの様子なども動画等で見せていただけるとさらによかったと思う。

⑤　ろう学校との連携・つながりの認識

・　有意義な時間となった。今後、相談があれば連絡させていただきたい。
・　校長先生の手話を交えた挨拶がとても印象に残った。つながりを持つことで、自分一人では対応できないことにも対応手段が生まれることを学んだ。また、同じ悩みを持つ人同士が共有し、解決方法を教え合うことの大切さについても学んだ。
・　校長先生の話にあったように、つながりがあることで、自分では対応できないことにも取り得る手段があることを学ぶことができた。

4. アンケート結果の検証

肯定的な評価が全体の9割を超え、専門機関での研修が大きな成果をもたらした。施設見学と疑似体験を組み合わせた構成により、音の聞こえにくさだけでなく不安感などの心理面に対する理解が深まった。受講者からは、難聴児への対応にとどまらず、通常の学級における指導環境や声掛けの工夫に活かしたいという意欲が多く示された。一方で、園・学校現場での具体的な対応や判断に関する課題感も示されている。今後は、研修で得た知見や支援技術の校内共有を推進するとともに、ろう学校をはじめとする専門機関との連携を強化し、継続的な相談体制を整えていく必要がある。

生駒市教育委員会主催研修会

生駒市英語教育小中連携会議 実績報告書

【日 時】令和8年7月28日（水）14:00～16:30

【場 所】生駒市役所 401会議室

【参加者】24名（小学校15名 中学校9名）

【テーマ】言語活動を中心に据えた授業づくり・単元計画

【ねらい】小学校では令和2年度、中学校では令和3年度から学習指導要領が全面実施され、外国語教育においては、小学校から中学校への学びの接続を意識した指導の充実が求められてきた。さらに、次期学習指導要領に関する議論においても、外国語によるコミュニケーション能力の育成や、児童生徒が主体的に学び、表現する学習の充実、小・中・高等学校を見通した系統的な指導の重要性が示されている。本会議では、外国語によるコミュニケーション能力の育成に向けて、小学校及び中学校における実践や課題を共有し、児童生徒の学びの連続性を踏まえた指導の在り方について理解を深める。また、中学校区ごとの情報交換を通して相互理解を図り、小学校から中学校への円滑な接続に向けた連携の在り方を再確認するとともに、各校の実情に応じた取組の充実を図ることで、外国語教育の一層の推進につなげる。

【アンケートより】（回答数21名 回収率87.5%）

1.本日の研修内容について

	1 とても良い	2 良い	3 普通	4あまり良くない	5 良くない
%	52.0	43.0	5.0	0.0	0.0

- 小学校との連携につながるから。
- 外国語における言語活動について学ぶことができたから。
- 小中連携を定期的にとることの重要性を再認識できた。
- 後半の中学校区の先生方との話し合いでは、卒業した児童の話も交えながら情報交換できてよかった。また、講演では目標設定を明確にすることの重要性を再確認した。2学期に生かしていきたい。
- 言語活動について改めて理解することができ、授業でも取り入れていく必要性を感じた。また、小中の学習内容のギャップをどう埋めるか、どのように緩やかに移行していくかは難しい問題だと思った。
- 同じ校区の先生方と交流できたため。
- 小中それぞれが難しいと思っていることを共有できたため。
- 小中別に言語活動の状況などのデータや結果を示してもらい、これまで取り組んできたことの結果が分かったから。
- 中学校でやっていることが分かり、小学校でやるべきことが明確になったから。
- 言語活動についての理解が進み、授業づくりに反映できそうだと感じた。
- 言語活動について改めて考えることができた。また、小学校の先生と交流できたことも収穫になった。
- 実際に小学校の先生方と情報を共有できたことがよかった。
- 中学校や校区内の小学校の先生と話をすることができたから。

- 小学校がどのような雰囲気で、どのような授業の流れをとっているのか分かったから。
- 中学校区別に話ができる時間があったから。
- 実際に中学校の先生と関わることで、子どもが感じている小学校とのギャップを知ることができた。中学校に入るまでに、小学校でもできることをしていきたい。
- 現状と課題について提示していただけたのがよかった。
- 同じ校区内の先生方と話ができ、情報共有の場としてとても役に立った。
- ペアトークで話し合い、悩みを共有できたこと。
- 言語活動を実施するに当たっての考え方を確認することができた。また、小学校の先生と今後の連携の方針について具体的な話をすることができた。
- 都度、話し合いの場が設けられていたから。

2. 本日の研修の内容は、授業づくり、子どもたちへの指導等に役立ちますか

	1とても役立つ	2 役に立つ	3あまり役立たない	4役に立たない	5わからない
%	38.0	62.0	0.0	0.0	0.0

- 言語活動について改めて考えることができたから。
- 中学校の先生と2学期以降の授業について話し合うことができたから。
- 言語活動の必要性について考えさせられた。
- 授業を組み立てていく際に、児童に身に付けさせたい力から逆算して考えることが、1学期の行事等の忙しさから十分にできていなかったことを反省した。
- 言語活動をどのように設定するか、考えていきたい。
- 言語活動に関して改めて理解が深まったため。
- 今年度の小中連携の方針が決まったのでよかった。
- 単元目標をきちんと意識し、どのように授業計画を立てていくべきか考えるきっかけをいただいた。
- 英語の授業の組み立て方が明確になり、改めて大事なことを確認できたから。
- 言語活動についての理解が進み、授業づくりに反映できそうだと感じた。
- 具体的な例を挙げて研修していただき、勉強になった。
- 小学校の先生方から得た情報をもとに、小中ギャップの少ない授業づくりやテストづくりにつなげたいと思った。
- 具体的な課題が見えてきたので。
- 小学校での授業とのギャップの解消に役立つと思う。
- 言語活動の定義について改めて考えることができた。
- 言語活動（言語活用）でどのような取組を行うかを知ることができた。目的、場面、状況を設定した上で行っていきたい。
- 単元末の言語活動を考えるヒントをいただいた。
- 評価に関して、グラデーションを意識したい。
- 言語活動を通して、子供たちが関わることの楽しさを見いだし、成長することが分かったから。
- 言語活動について知見を深めることができたから。
- 他校区の先生たちとも話す機会があり、連絡を取れるようになったから。

3. 日頃の外国語活動、外国語の授業で困っておられることがあれば具体的にご記入ください。また、本日の会議に関しての感想やご意見などがありましたら、ご記入ください

- ALT との打合せについて知りたい。
- 勉強不足で申し訳ないが、小中連携は義務なのか協力ベースなのか教えていただきたい。
- 小学校では英単語を学習するが、書くことにはあまり力を入れていない。このままでは中学校に進学した際に困るのではないかと心配している。どこまで書く活動を取り入れればよいのか迷っている。
- 学級担任によって取組に温度差があると感じる。高学年は成績にも関わり、指導書もあるため大きな差はないように思うが、中学年では ALT にどこまで任せるかなど違いがあるように感じる。困っているわけではないが、英語も専科指導がよいかもしれないと思う。
- 現在は担任が授業を担当しているため取組にばらつきがあり、英語の授業が後回しになってしまっていること。
- 昨年度の小中連携の内容や、他の中学校区でどのような取組が行われているのかを知りたかった。
- 中学校1年生の教科書を学校に1冊配布していただけると参考になると思う。
- 国語科でもそうだが、書く活動には特にハードルがあるように思うので、どのように取り組んでいくか考えたい。以前奈良市で勤務していた際には、フォニックスなどを体系的に学べる動画があり、子どもたちは毎日それを見ながら発音やスペルを繰り返し学び、無理なく身に付けていた。生駒市でもできたらよいと思う。
- 教科書内容の履修に時間をかけると、どうしても言語活動に多くの時間を割くことは難しいのではないかと感じている。現在も短時間ながらそのような時間を設けているが、さらに工夫できる点を検討しながら日々取り組んでいる。

4. アンケート結果の検証

研修満足度および指導への有用感がともに肯定的な評価となり、高い成果を得ることができた。特に「言語活動の再理解」と「中学校区別の対話による小中ギャップの認識」が受講者の学びの深まりにつながった。小中双方の課題やデータを共有したことで、身に付けさせたい力からの逆算や指導の接続に対する意識が高まった。一方で、小・中の指導の差異（「書くこと」の指導度合い等）や指導体制・履修時間に関する現場の課題が明確になった。今後は、校区ごとの定期的な情報交換を継続するとともに、小中の学びを円滑につなぐための具体的な指導計画の共有や環境整備の検討を進めていく必要がある。

○ 次年度に向けて

今年度の研修では、分科会方式や体験型講座、校種を超えた対話の導入により、受講者が主体的に学び、自校の実践や指導の接続について深く考察する大きな成果が得られた。一方で、研修の中で紹介された先進事例の自校での実現可能性や校種間における指導の連続性、専門的支援の難しさなど、現場特有の課題も明確となった。次年度に向けて、より多くの教職員が参加できるよう研修の魅力や趣旨が事前に伝わる丁寧な広報を展開するとともに、対話や意見交流に集中できるよう適切な会場環境の整備に努める。さらに、対面研修で得られる対話・交流の価値を高める一方、オンデマンド配信の継続により多様な受講ニーズに対応し、全教職員の受講機会を保障していく。今後も現場のニーズに応じた工夫を重ね、教職員が自走して授業改善や児童生徒理解に取り組める質の高い研修体系の構築を目指す。